電友会だより

（発行日）
平成二十六年
三月一日
（発行者）
棚木　武夫

巻頭言

昨年の揮毫（きごう）『輪』について

会長　棚木　武夫（昭和三十六年卒）

その年のキーワードを清水寺住職が年末に書く漢字一文字で表現する揮毫「輪」が披露されたことについて述べたいと思います。

東京オリンピック誘致を指しているが、他にもっと相応しい文字があったのではないのかとの異論があったことでしょう。

さて、会工電友会は節目の二十年を迎えているが、経年の割には加入会員数の低迷が見られて久しいのは卒業生の意識の変化が根底にあるのは止むを得ないことである。これについては、活性化を如何にして図るか企画元である事務局が腐心しているところであります。せめて地元在住のリタイヤ後の卒業生は電友会の懇親の「輪」に加わっていただくよう、特に役員各位による勧誘に期待したいと思います。

《電友会の活動報告》

◇史跡巡り（五月）

「松平家廟所」を訪ねる

副会長　大川原　史郎（昭和三十年卒）

電友会恒例の史跡めぐりは会津松平家、歴代藩主の眠る松平家廟所を訪ねた。風さわやかな五月二十三日（木）、会員有志十三名が参加し、小生が案内役を務め、武家屋敷駐車場から徒歩スタートした。

廟所入り口の案内板前で廟所の歴史や概要について説明。保科正之の嗣子であった正頼が明暦三年（一六五七）二月、十八歳で死去した際に、この南斜面の地を松平家の墓所として定めたこと、総面積四万五千坪に亘る墓域は近世大名家の中でも、荘厳な規模と言い、宗教的雰囲気は全国に例を見ないという理由で、昭和六十二年に国の史跡指定を受けたことなどである。墓域については区画が五つに分かれるが、登る順に従い説明する。

往時を偲ばす石畳で造られた参道を登って行くと、左手に「西之御庭」の墓所がある。

ここは最初に造られた墓域で、正之の次男正頼（十八歳没）、三代正容の四男正房（十七歳没）が埋葬されている。その他に「拝領妻事件」で有名な四代容貞の生母伊知の方や、藩主の子女達が仏式で埋葬されている。

この墓域の隣に「中之御庭」墓所があり、正之五男正純（二十歳没）や歴代藩主の夫人、側室、子女が仏式により埋葬されている。

更に上方に移ると「二代藩主の墓」がある。二代藩主正経は三十六歳で亡くなるが、葬儀については正経の望みもあり、また建福寺住職黙堂の強い働きかけがあり、建福寺において仏式で行われた。いち早くこの墓域に鳳翔院殿の墓碑が建てられたので、歴代藩主の墓碑列から外れている。

これより息を切らして数十段の石段を登り切ると、横一線に並んだ歴代藩主の墓所が目に入る。十年程前には鬱蒼としていた墓域も、公有化されたことにより整備され、見違えるほど明るくなった。

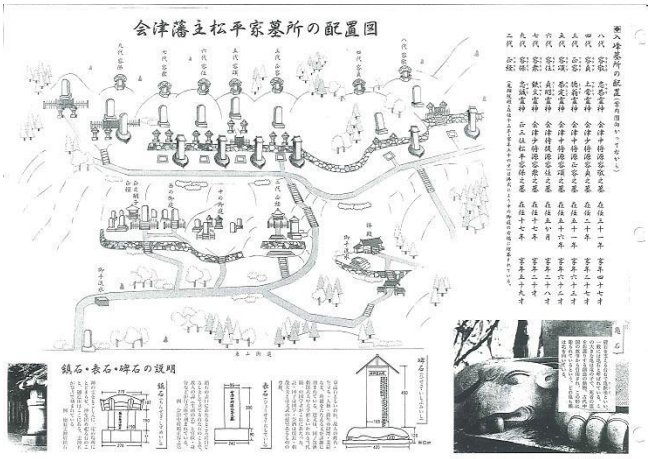
歴代藩主の墓所は、猪苗代の土津神社に神様として祀られた初代藩

主保科正之公の墓所形式を踏襲したものである。二代藩主以外は神霊号を賜り神式墓地形式により造られた。

墓所は前面に墓誌を刻んだ「碑石」を、亀をかたどる台座上に置き、一段高い所に対の石灯籠を並べて、その奥に生前の名前を刻んだ「表石」が建てられている。更に一段と高い所にある円墳の下部に藩主の遺体が埋葬され、円墳上には神を鎮め祀ると言われる、八角形の「鎮石」が設置されている。

なお、十代以降の松平家当主及び家族の墓は仏式による「松平家之墓」に納骨されている。

汗びっしょりの中、松平家廟所を後にして武家屋敷内の九曜亭で昼食を摂り、解散となったが、会津松平家のルーツを再認識した一日であった。



会津藩主松平家墓所の配置図

◇研修会(七月)

「施設視察・研修会」を開催

事務局長 **浅田 誠**（昭和四十三年卒）

本会の年間行事で大きな位置付になっている「施設視察・研修会」の今回の取組みについては、昨年実施した「若松会工会」と合同の「東日本大震災被災地視察研修」の開催に鑑み、参加者の増加と多くの方々の視点から密度の濃い研修会になるよう、本年の開催も「若松会工会」と合同で開催した経緯にあります。

この様な背景を踏まえ、参加者二十四名中、本電友会より半数近い十一名の方々に参加を頂き、平成二十五年七月九日(火)に実施し、午前九時から午後三時までの六時間、密度濃く、充実且つ満足頂けた有意義な一時であったと自画自賛しているところであります。

今回の研修・視察先は、工業界の花形産業である自動車の製造工場が会津地区で隆盛を極めているとの紹介を受け、会工同窓生として胸の高鳴りを覚え、喜多方市岩月町宮津にある「本田金属技術㈱喜多方工場」に打診し、二つ返事で快諾を得て実現した経緯にあります。工業人としての現役時代を呼び起こさせる発奮の機会にも繋がった取組みにもなったところであります。

もう少し詳しく紹介してみますと、本田技研工業㈱の有力な関連企業として、ホンダ車の高性能なエンジン機能を支えるアルミ重要部品を一貫生産するアルミ精密金型鋳造のパイオニアとして埼玉県川越市に本社・工場を置き、昭和五十年十二月に喜多方工場として創業開始したそうです。現在では機械加工工場も含め、ロボットハンドでの独自アルミ鋳造技術を駆使し、第三量産工場を有するまでに成長し、二百四十名の従業員で三交替勤務をし、平成二十三年実績で六十二億円の売上高を計上するも、現在は世情の影響を受け減産を余儀なくされながらも、製品ラインアップを自動車産業に留まらず様々なフィールドに広げ、卓越した技術力で高性能を美しいカタチに凝縮しオートメーション化を推進して、お客さまへベストクオリティをお届けすることをモットーに頑張っている、と説明員からの熱き思いをしみじみと拝聴したところであります。

アルミ精密鋳造の工程を、金型設計・製作から完成品の品質管理までの工程を見学させて頂き、久しぶりに大きな感動を体験したところでありますが、見学コースでの写真撮影は認められず、十分な思いを紙面で伝えられないのが残念でなりません。今後の機会には更に多くの方々と感動を共有できたら、との思いを持って工場を後にしたところであります。

その後、昨年のＮＨＫ大河ドラマの主人公である新島八重さんと同時代に、全国に博愛慈善の施策を広め、今日の社会福祉事業の先駆者として数々の功績を残し、熱塩温泉郷の示現寺にある、日本女性で初めて藍綬褒章の栄に浴された「瓜生岩子刀自座像」を参拝し、そして同郷にある生家の「山形屋」様で、昼食・懇親交流会を開催し、ゆっくりと温泉に浸かりながら日頃の疲れを癒すとともに、お互いの近況を確認しあったりして、ゆとりの一時を満喫して頂きました。

参加して頂いた方々には、貴重な研修会であった、との御礼を頂戴したところでありますが、その貴重さを十分にお伝えできず申し訳なく思いながら、今後も種々工夫を凝らし多くの参加者にこの思いを体感して頂けるよう紹介して報告といたします。

本田金属技術㈱喜多方工場にて

示現寺・瓜生岩子刀自座像前にて

◇定例総会(十月)

第十九回・「定例総会・懇親会」を開催

事務局長 **浅田 誠**（昭和四十三年卒）

本定例総会および懇親会は、去る平成二十五年(二〇一三年)十月十八日(金)に、例年継続した開催会場になっている「ホテルニューパレス」で会員二十七名とご来賓の方々九名を加えた三十六名で開催され、翌日開催の「会工同窓会総会・懇親会」並びに「松江春次記念館落成祝賀会」に連動した取組みになり、前年の「母校創立百十周年記念祝賀会＆会工祭」に引き続き、二年連続で位置付の高い・実りある日程設定となり、遠方の参加会員の皆様からも絶賛されました。

総会は、昭和四十年卒の長谷川与一さんを議長に選出し、平成二十四年度(期間：平成二十四年十月一日～平成二十五年九月三十日)の活動経過報告、会計・会計監査報告ならびに平成二十五年度の事業計画・会計予算が満場一致の拍手で承認・可決されました。

活動報告の中では、昭和三十年卒で現在「会津史学会」の事務局長を務めておられる大川原史郎さんのご案内で実施した「(史跡探訪)会津の歴史巡り・松平家廟所を訪ねる」は、会津藩の歴史と御廟の謂れを再認識する機会となり、有意義な企画事業であった、との声が寄せられました。紙面をお借りして大川原講師に感謝申しあげます。加えて、本年度の総会議案書から、会員からの総会出欠返信に記載して頂いた方全員の近況報告全文を掲載した事に対し、久しぶりに同級生の近況が確認できて有りがたかった、との声も多く寄せられたところでもありました。

議事終了後には、会工高・電気科主任の井上浩一先生より、卒業生の進路状況など後輩の近況報告を受け、後輩の活躍に全員の大きな拍手でエールを送ったところであります。

続いて総会終了後の取組みとして「これからの社会環境を考える」と題して、元会津短大・会津大学教授の佐々木篤信氏を講師に迎え特別講義を拝聴し、「何のために社会学を学ぶか・社会学とは・近代の延長としての現代・経済危機と社会危機・大震災と原発事故が示唆するもの・会津に生きるものとして学びたいこと」といった視点から、今後の我々の人生・社会への係わり方の羅針盤ともなる教訓を沢山ご教示頂いた思いであります。

恒例の懇親会では、昨年に引き続き昭和三十一年卒の湯川村在住の佐野常雄副会長に「秋田大黒舞」をご披露頂き、大いに懇親会を盛り上げて頂きました。御礼とアンコールの拍手が鳴り止まず、再登場して顔見世をお願いした状況でした。

この様に、人生・人格形成の最重要な青春時代を同じ学び舎で過ごした同志が一堂に会して懇談できる本会は唯一無二であり、この事を多くの仲間に広報して、更なる組織拡大に一人ひとりが宣伝・営業マンになって頑張ることを誓い合って、応援歌と万歳三唱に託して、本会を締めくくりました。

【頑張れ応援歌】

頑張れ 頑張れ 頑張れ 健男子
栄えある健児よ
理想の盾をば振りかざし
破邪の剣とりて起て
打てやこらせや
我等が敵を
勝ちて勇姿を
世界に示すは この秋ぞ
奮るえや 会工の健男児
フレー フレー フレー

《電友会仲間の活動状況》

横浜クラス会報告

横浜市　**堀　一清**（昭和三十六年卒）

平成二十五年度のクラス会は、初めて会津以外の横浜にて九月九日（月）から一泊二日で行いました。

前回は、芦ノ牧温泉で古希同級会として実施しましたが、その席で、「次回は横浜に集まろう！」と言う声があがり、横浜の中華街にある「ローズーホテル横浜」で開催しました。

遠い所では上海から武藤君、広島の荒井君、仙台の弓田君など総勢十七名の参加でした。

開始は午後四時を予定していましたが、早目に着いた人達は昼食を共にし、その後、ホテルの前から観光周遊バスの「あかいくつ号」を利用し、マリンタワーや山下公園などの観光を楽しみました。

あかいくつ号

会合では飲食に先立ち、亡くなった十一名の方々に黙祷を捧げ御冥福を祈りました。続いて近況報告を素顔の内にやりました。夕食は、ビール・日本酒・紹興酒など等で喉を潤し、中華料理に舌鼓を打ちながら、会工時代の話、仕事の話、健康の話など尽きる事はない様でしたが、最大のイベント「工場群のナイトクルーズ」が予定されていましたので、会食は午後七時でお開きになりました。

観光船は我々だけの貸切りで、全員救命ジャケットを身に着け出航しました。船長さんの案内によると、３・１１の震災の後は夜景の灯りの量が大分少なくなったそうです。

次の日は、時間の都合で三名が別れましたが、残り全員で中華街・横浜スタジアム・赤レンガ倉庫群などを散策し、最後に北朝鮮工作船展示館を見学しました。

テレビや新聞などで幾度も取り上げられたとは思いますが、直接生々しさが伝わる展示物でした。

その後、次回は会津で開催することにし、流れ解散となりました。

幹事をした、堀雅宏・馬場・武藤・鈴木靖夫君、お疲れ様でした。

《会工高　電気科からの寄稿》

「平成二十五年度を振り返って」

電気科長　井上　浩一

卒業おめでとうございます。今年度の卒業生は入学前の三月十一日東日本大震災に遭遇し、多くの困難を乗り越えての卒業であると思います。本当におめでとうございます。

私は、会津工業にお世話になり二年目となりました。今年度より学科長を務めさせていただくこととなりました。今年度の電気科の状況を紹介したいと思います。

今年度の電気科メンバーは、中野善司、鳴瀬良、中丸淳、井上浩一、櫛田古瀬、高野美早紀の六人であります。

電気科の資格取得状況について

①電気工事士

電気科卒業＝電気工事士取得が望ましいと思っています。本校でも今年度の卒業生より、一年次より電気工事士第二種合格を目標に取り組んでまいりました。左記に現在の合格状況を提示いたします。

	第二種電気工事士資格取得者	第一種電気工事士資格取得者
平成二十三年度入学生（現卒業生）	三十八名	五名
平成二十四年度入学生（現二年生）	三十二名	三名
平成二十五年度入学生（現一年生）	二十六名	一名

第二種電気工事士全員合格という目標を掲げて取り組んでおりますが、現実のところ、目標達成に至っておりません。我々電気科教員の指導の方法を振り返り、生徒自身の意欲を高めることも行っていかなければならないと思っております。

②技能検定電気組立部門（シーケンス制御）

前任の科長を務めていただきました海和先生のご尽力により、本校には十二台を超える技能検定電気組立部門シーケンス制御試験キットが設置されております。福島県内でこの資格に取り組んでいるのは、会津工業高校だけではないかと思われます。この資格に対する求人企業の期待は大変大きく、この資格を取得している生徒を指名する企業もある状況です。会津工業高校電気科のシンボルとなる資格になると思われます。

そこで、今年度より、この資格に対して、教員全員で指導する体制を確立することといたしました。人事異動により、指導体制が途切れることの無いように進めていく所存であります。

十二月には、ニノテック㈱様のご厚意により、電気科教員を対象にしたシーケンス制御ソフト利用講習会を開催いたしました。我々教員も学習することの楽しさを感じた講習会でありました。

今年度は八名の生徒が受験いたします。我々教員の力量を超えるほどのシーケンス制御設計力を持つと思う生徒もおりますので、合格するものと期待しております。

以上二つの資格についてご紹介しましたが、今年度の資格指導は左記の通り行いました。

四月～五月　第二種電気工事士筆記試験講習会
六月～七月　第二種電気工事士実技試験講習会
九月～十月　第一種電気工事士筆記試験講習会
十月～十一月　第一種電気工事士実技試験講習会
十二月～二月　電気機器組立シーケンス制御講習会

年間を通して資格取得講習会を続けてきました。生徒には負担も大きいですが、電気科の資格は実利益を伴った資格でありますので、今後とも継続して取り組んで行きたいと思います。ご理解ご協力をお願い申し上げます。

電気科のその他の活動状況

①修養会

学年を超えて学科単位で行う交流会の名称であります。

今年度は、鶴ヶ城の本丸にて、学年対抗レクレーションを行いました。各学年より、代表者二名を選出し、左記の五つの競技に取り組みました。

NO	競技名	優勝学年
①	サッカーリフティング	三年生
②	腕立て伏せ	三年生
③	二重縄跳び	二年生
④	コーラの一気飲み	二年生
⑤	ジェスチャーゲーム	一年生

周囲には多くの一般観光客が取り囲む形となりました。①②の競技は、体力と技術を要する競技であったことから、上級学年である三年生が圧倒し優勝しました。③④の競技は特異な体質を要する二年生の独壇場でありました。⑤の競技は一生懸命さが目立った一年生が勝利をつかむことができました。

異学年の交流を図ることができ、楽しい会になったと思っております。

②再生可能エネルギー教育成果発表会

文部科学省平成二十五年度復興支援事業として、小学校三校、中学校三校、高校三校が選抜され、環境エネルギーに関して研究する事業であります。会津工業高校電気科は、今年度、課題研究の一班が参加いたしました。

課題研究のテーマは「発電システムボードの製作」です。70×90㎝サイズのボードに、太陽光発電システム、風力発電システム、水力発電システムを搭載し、再生可能エネルギーを視覚的に捉えることのできる発電システムを紹介するためのボードを製作しました。十二月に開催された発表会では、小学校・中学校の関係者に大変好評であり、工業高校の存在価値を広めることができたのではないかと思っております。

以上、今年度の電気科の活動状況を紹介しました。昨年はＮＨＫ大河ドラマ「八重の桜」が放送されました。私も毎週楽しく視聴しました。主人公である八重さんは、積極的な行動で自分の道を切り開いていくように描かれていました。私は、八重さんの前向きな姿勢に清々しさを感じました。

本校の生徒も八重さんのように、現在の課題である学業、部活動、学校行事に積極的に取り組んでほしいと思います。八重さんと同じ会津魂の持ち主ですから。

私達電気科職員も日々の学校活動に積極的に取り組んでいきたいと思います。がんばろう会工電気科！

「平成二十五年度電気科三年生を卒業させて」

三年担任 **櫛田 古瀬**

電気科三年生三十九名が無事卒業を迎えました。私は教員生活で初めて担任を持たせていただき、生徒とともに成長することもでき、会津工業高校とその職員、生徒達に感謝の気持ちでいっぱいです。電気科三年生は男子のみのクラスであり、運動部が三十人程度いるというとても活発なクラスでした。そのせいもあってか、球技大会や会工祭、修学旅行、遠足等の行事では他のどの学科よりも行動力がみられました。反面、クラスの半分以上の生徒が運動部に所属していることで、資格取得指導やものづくり指導、進路指導にもなかなか時間の取れない生徒も多くいる状態ではありました。そんな学校生活であっても、難関資格へ挑戦する生徒は多数おり、主な結果は以下の通りになります。

◎第二種電気工事士　三十八名合格　◎第一種電気工事士　五名合格
◎二級ボイラー技士　一名合格
◎技能検定三級（シーケンス制御作業）二名合格。

進路に関しては、昨年度と比べ県内就職者が増加し、逆に県外就職者が減少している。また進学をする生徒も増加傾向にあった。企業からの募集人数減少等もあり、昨年度から一次募集での不合格者が増加している傾向もあるが、生徒全員が進路決定することができ、とても嬉しい限りでありました。結果は以下の通りになります。

県内就職者　十三名、県外就職者　十六名、大学進学　二名、
専門学校進学　八名

主な業種は製造業が多く、電動機や変圧器等、大型の電気機器を製造する企業に就職している生徒が多い。会津地区であれば、レンズメーカーに多くの生徒が就職している。

学校生活では、二年生時にあった会工祭が生徒達にとってとても印象に残っており、実習で培った知識・技術を駆使してゲームの装置を作り上げていました。工業高校生の素晴らしさを目のあたりにした時期でもありました。修学旅行も印象深く、本学年は長崎へ行きました。食事の味付けは斬新であり、みそ汁や醤油までもが甘かったことに衝撃を覚えています。漁業体験や民泊体験も良い経験となり、生徒達の視野が広まったと感じました。

卒業式、様々なことを経験し、結果も出してくれた生徒たちに感謝するとともに、私も負けずに努力をしていこうと感じました。

三年間の思い出

三年電気科　ＨＲ長　蜷川　景太

会津工業高校電気科の一員として過ごした三年間はすごく濃い時間だったと思います。

まず、一年生時、高校生になったというウキウキした気分で入学式を迎えました。新しい友達を作ろうと、連絡先の交換をしたり、ワイワイ騒いだりしていました。その結果、とある一人の先生からきつく叱られました。高校生にもなって落ち着きがない、髪が長い、他にも色々と注意を受けました。このことがあり、中学校と高校の違いをはっきりしようと思いました。新しい生活が始まり、楽しみにしていた部活動も始まりました。私は小学校から続けているバスケットボールを高校でも続けていきたいと思い、入部しました。中学校までの練習量とは全く違い、毎日夜遅く帰宅し、土日も練習があり、地獄のようでもありました。

部活動をすることは良い事ですが、勉強も大事なことです。電気の専門的な授業が始まり、理解することが困難であり、苦戦する毎日ではありましたが、勉強と部活動の両立を図りました。資格取得のため電気工事士の補習が始まり、初めて見る単語、公式、工具類等、覚えることが非常に多く大変でした。何種類もの記号とケーブルの種類を覚えることから始まり、複線図の仕組みを理解し、工具を使った実技練習は今でも覚えています。私は勉強が苦手なこともあり、三年間かけて取得しました。先生方には資格の指導だけでも三年間お世話になりました。

夏には球技大会があり、男子三十九名の電気科はすごく熱い思い出があります。運動部に所属している人が多いこともあり、電気科としての成績が上位でした。優勝はできませんでしたが、一致団結して取り組めたので良かったです。

また、二年生時には文化祭も行われました。電気科の知識を生かした製作物をつくり大いに盛り上がりました。ここでも一致団結をして取り組めました。

この三年間、最高の友達、良い先生方と一緒に思い出深い生活ができて本当に幸せでした。電気の知識は勿論ですが、高校生活で学んだ

忍耐力、協調性を今後の生活にも生かしていきたいと考えています。

感謝と希望を持って

二年　電気科　**丸山　直幸**

まだ雪も寒さも残る二年前の三月に私たちは、この会津工業高校で自分の合格をとても喜びました。

入学してすぐ電気科の一年生は必修となる第二種電気工事士の取得に向け動き始めました。電気の専門の知識というのはその頃の私たちにはまだなく、初めて問題を解いた時は本当に取得できるか心配になりました。そんな中、電気科の先生方は私たちに優しく何度も教えて下さいました。そのお陰で今はクラスの大半が第二種電気工事士の資格を持っています。

この会津工業は多くの人が高校を卒業すると同時に社会に出ます。そのため校外から企業の方を招いて社会に出てから必要になることや、最低限のマナーなどを教えて下さいました。また、工業高校ということもあり、特殊な職種の方々も多く来校して下さり、普段目にすることのない裏方の話を聞くこともでき、私たちのこれからにとても役立つ話を聞くことができました。また、会工は学校行事が盛んで、今年は球技大会をはじめ、ミニ文化祭、競歩大会、遠足に修学旅行など思い出になる事が多くありました。

私たち二年生はこれから自分の進路に対して先生方と話し合い、決定する時が来ます。私はこの会津工業の電気科で学べたことを誇りに感じています。親身になって接して下さる先生方や笑い合えることのできる仲間たちには感謝でいっぱいです。これから先がどのような道になっているかは、まだ全くわかりませんが、この会津工業で培ってきたものを信じて希望を持ってこれから頑張っていきます。

《会員・同窓生からの特別寄稿》

私の尊敬するＡ氏との運命的な出会い

愛知県小牧市　**佐瀬　一信**（昭和二十六年卒）

私は、会工電気科卒業の第一期生です。卒業当時の会津若松市内には交通信号機やネオンサインなども無い、戦後六年足らずの戦後復興の初期に当たり就職難の時代でした。

同期の卒業生の中でＫ君と私の二人は、住まいの確保と保証人の紹介を前提条件に菊地巌先生の御尽力によって東京品川の山光社というメーカーに入社出来ました。入社した会社は通信機器などを生産する数々の特許権を持ち、関連機器のある特定製品の生産部門では独占的な企業として多忙でした。このため後輩が続々と入社する数年間がありました。

その頃、電力会社向けの操作制御装置なども製造するようになった後のある時、四国電力の水力発電所へ操作制御装置の調整検査の技術派遣で昭和三十三年から三十四年にかけて赴任した折、不具合が真夜中までかかっても解決出来ず泣いたことも度々ありましたが、「会津魂」を発揮して頑張り貫き、完成して先方に引渡すことができました。このときの四国電力のＡ氏には大変な御協力を戴いて感謝し、今でも近況報告などのメール交信などで交友が続いています。

昭和三十四年に名古屋へ転勤となりましたが、当時の日本経済は高度成長期に入り各電力会社は大規模な一次変電所の新設が相次ぎ会社の業績が拡大する中、我国は世界第二の経済大国となりました。

我社はＭ社と共に、ある設備の技術開発の発想が類似していたため私が両社の仲介役となって共同開発することとなりました。その頃、私が四国電力へ納入した設備の現地調整検査で技術的に大変お世話になったＡ氏が我社の技術開発部長として着任されました。なんと運命的な出会いでありました。

さて、平成十八年七月に国際学会が韓国で開催されることになり、Ａ氏が日本代表として当学会で発表することとなった。この際、Ａ氏から名指しで私に是非とも同行参加を求められ鞄持ちの形で同行しました。Ａ氏は十件程の特許権を持ち、母校の徳島大学へもその論文が

送付されていました。帰国直後に同大学から工学博士号授与の通知があり、真っ先に四国高松から小牧の拙宅にわざわざ訪ねて頂き祝杯を挙げて歓喜の美酒に酔いました。この時のＡ氏は何と八十歳の高齢ながら知力体力は溌溂としておられました。

この様に、人との出会いは奇遇ではありますが、私の人生にとってのＡ氏は恩師であり、生涯の友となりました。

ついては、私も今年は満八十二歳を迎えるに当たり、心身の健康に留意しつつ、Ａ氏を見習った人生を全うしたいと思います。

最後になりますが、会工電友会の発展を祈る。

「鐘」から「校内放送」へ

東京都足立区　**清野　吉男**（昭和二十七年卒）

昭和二十一年四月、私が入学した時は、日立製作所の軍需工場としての設備が撤収されたあと、講堂としても使用されていた雨天体操場に近い教室には、床板を外して取付けられた工作機械のベットが残っているのを見ました。実験・実習用の機材は、精密級の電圧計・横河Ｌ－16テスターなど数点。無に等しい状態で電気通信科に相応しいものは、何ひとつ無いというのが、実感でした。専門科目の教科書「電磁事象」は「物理」教科書の印象でした。

始業・終業を知らせる「鐘」は、私の出身校新郷国民学校の鐘よりは、一廻りも二廻りも大きいものでしたが、「じょうばんさん」の手で鳴らされていました。

昭和二十二年四月「学制改革」により、併設中学校の二年生に。新入生の募集がなかったため下級生のいない二年生。四月二十九日には天長節(昭和天皇の誕生日)祝賀式が雨天体操場で行われています。祝賀式は、これが最後であったといわれていますが、雨天体操場は、引き続き講堂として使用されていました。

伝達の為の「鐘」は、そのまま使われておりましたが、符号による鳴らし方もありました。いまでも覚えているのが、次の二つです。

一、教員集合　○○・○○・　二点打　カンカン　カンカン
　　せんせ　こい

二、週番集合　○○○○・○○○○・　四点打　カンカンカンカン
　カンカンカンカン　しゅうばんしゅうごう(「週番」は各クラス一名定められ連絡にあたっていました)

昭和二十三年になってからは、カリキュラム編成などの教員会議が頻繁に行われるようになり、「二点打鐘」のあと、四点打鐘で集められた週番から午後は自習、自宅に帰ってもよいと、告げられる事が多くありました。

帰り支度をして町に出て、向かう所はレコード店でした。当時の若松市では、時計・眼鏡店の片隅に、レコードを販売するコーナーがありました。そこで、クラシック音楽のレコードのサワリを一寸だけ、聴かせてもらうのが楽しみでした。そして、フルートは、やっぱりランパルでしょう～などと大人じみた事を言うと店の方も、これに合わせてくれ、楽しい時間を過ごしました。

昭和二十四年四月、会津工業高校一年生となり、科名も、「電気科」に変更されていました。

専門科目「発送配電」では、電気通信科志望グループの強い要望により、弱電グループとして一部内容を変更して、搬送電話・連接電話・タブレットなどの鉄道信号、について受講する事となりました。

実習では、

一、校内変電所の屋内配線工事

二、練兵場跡に建てられた某工場の変電設備工事のうちアース線工事。

三×六尺銅板(〇・九ｍ×一・八ｍ)を深さ二ｍほどのところに埋設。元、清水があったのか、冷たい水が湧き出し、10分も足をつけていられない程で苦労しました。

昭和二十六年五月、待望の校内放送設備が導入される事となりました。工事は全て、教職員と生徒で行う事が決定されました。日程は、修学旅行が予定されている六月四日～七日に決まり、工事にあたる生徒は、事情により修学旅行を辞退した十余名全員に決定しました。

工事は、渡部与志雄先生がチーフとなり、生徒は、スピーカの取付

けとその配線を行いました。生徒の中には、初めての経験のため、配線止めのステップルを強く打ち過ぎてトラブルとなった事もありましたが、完成し清々しいチャイムの音に続いて音声が流れた時は、電気通信志望の私としては、このうえない喜びを感じました。

長い間お世話になった「鐘」は、老兵の如く静かに引退したのだと思われます。

あれから三年

いわき市　大川原　昌之（昭和二十八年卒）

平成二十三年三月十一日、いつもの様に一日置きに通う「いわきゆったり館」での水中ウオーキングと温泉入浴を楽しみ、午後一時半頃帰宅して水着等を干し、テレビを見ながらのんびりとしていました。

午後二時四十六分、便所で小用の最中にグラッとしたので、眩暈かなと思ったら次の瞬間ぐらぐらっと物凄く揺れだしたので、これはヤバイ！地震だ！慌てて便所を飛び出し窓のそばにいると、立っていられないくらい大きな揺れが一～二分程も続いたろうか。少し揺れが収まりかけたなと思ったら、次の瞬間、更に大きな揺れが始まった。第二波かなと思いながら外を見ていると、向かいの家の二階の瓦が、ガラガラッともの凄い音をたてながら落ちてきました。

このとき物凄く恐ろしく感じ、我が家は大丈夫かなと心配になりました。前後三分程の揺れでおさまったので、外に出て家の周りを確認したら、被害は無く安心しました。

その後、テレビで地震の強度や、津波の被害状況などを見ていたら、自動車や船などがゆっくりと流されて行くのが、まるで映画の特撮のように見えて現実とは思えないほどで、特撮映画はほんとにすごいなと変なところで感心したのを覚えています。

我が家の被害は無かったのですが、その夜電気・ガスは来ているのですが水道が断水してしまい翌日から大変に苦労しました。

翌三月十二日土曜日、近所の人たち数人と地震の事、津波の事、断水の事、原発事故の事などを立ち話していると、楢葉町から避難してきた人に中央台の避難所への道を聞かれ、色々の話を聞いたら、途中の避難所は一杯で次が三箇所目だとのことで、これは大変な事だと思いました。あの人は今も避難所に居るのだろうか。

話は変わるが、この日は隣組の親睦会を近くのレストランに予約していたのですが、地震の後だし断水もしているので、当然のこと中止になると思っていたら、レストランからの連絡で大水槽に水は有るし、仕込みもして有るので予定通りできますと云う事で、この夜は飲んで歌って食べて、地震の翌日に宴会をしたのは我々だけかなと思っています。

あれから三年、原発事故の始末はいつの事やら、避難させられた人達はこの後どうなるのか。

あの大きな揺れと瓦の落ちる音、この恐怖感は多分死ぬまで忘れないと思う。

２０１１年（平成２３年）
あの３月１１日　午後２時４６分の
「恐怖」と「不安」を
私たちは絶対忘れません。
頑張ろう　会津！
頑張ろう　福島！

沖縄視察より

会津若松市　**近藤　信行**（昭和四十年卒）

吐く息も凍る大寒の日、朝一番電車で会津若松駅を出発。羽田空港は平日にもかかわらず混雑していたが、十一時のフライトで沖縄に向かった。眼下には、あたかも雪国の平原のような雲海が広がっており、とても美しく幽玄な気持ちになった。さしたる揺れもなく、十四時、春のような那覇空港に無事着陸。糸満市の議会事務局から、沖縄県営平和祈念公園を事前に視察するよう、言われていたので、早速、レンタカーをチャーターし資料館に向かった。

平和祈念資料館は戦没者の追悼と平和祈念、戦争体験の教訓の継承や安らぎと学びの場を目的として設立された。悲惨な沖縄戦記録写真のパネル展示や火炎放射器で壕（ガマ）を攻撃している映像などが流されており、生存した人の沖縄戦戦争体験証言集も展示されていた。

同じ敷地内にある「平和の礎（いしじ）」は太平洋戦争・沖縄戦終結五十周年を記念し、恒久平和の願いと戦争の悲惨さを後世へ伝える目的で建設されている。ここには国籍や軍民の区別なく、沖縄戦での全戦没者氏名が刻銘されている。総数二十四万千二百二十七名が摩文仁の海を望んでいる。また、軍の要請もあり十代の女子学生たちは「ひめゆり学徒隊」として結成され、南風原（ハエバル）陸軍病院に篤志看護婦として配属された。彼女たちのあまりにも悲惨な最後に心が痛んで仕方がなかった。空にはオスプレイが飛んでいた。

翌日、糸満市役所で平和教育と平和活動のレクチャーを受けた。幼稚園では絵本を使った戦争の恐ろしさや友達と仲良く過ごせる大切さなどの教育や、「平和ガイド」の研修として被爆地である広島県や長崎県へ小中学生を派遣し、「平和子ども大使」の育成をする「平和の語り部育成事業」など積極的な平和教育と活動を推進していた。

「戦争ほど悲惨で残酷なものはない。平和ほど尊く幸せなものはない。」そんな先哲の言葉を思いながら、二十三時に会津若松駅に到着。戦争と平和を考える有意義な沖縄視察だった。

平和の礎（いしじ）

平和の火

平和祈念公園

【編集後記】

今回も無事「電友会だより」を発行することが出来ました。寄稿くださいました皆様に感謝申しあげます。

電気科の先生方はじめ生徒の皆さんの熱き想いや、諸先輩のご活躍の様子を伺う事ができ、嬉しく思っております。

昨年、会津はＮＨＫ大河ドラマ「八重の桜」で賑わいました。三年前の震災では直接の被害は少なかったものの、風評被害などで沈滞ムードにあった会津に、明るい春の兆しを感じています。

故郷会津・母校会工・そして本会運営に対し、会員皆様の温かいご支援をお願い申しあげます。

（編集委員　白井　達夫　昭和四十三年卒）

＊編集委員　大川原史郎（昭和三十年卒）
根本　一雄（昭和三十六年卒）
棚木　武夫（昭和三十六年卒）
菊地　良三（昭和三十七年卒）
近藤　信行（昭和四十年卒）
浅田　誠（昭和四十三年卒）